

人上生日
忌周七第
號念記

統

法財
人圓

統

團發行

次 目

繪 口 青年時代の本多上人と其一家
第七周忌記念講演會

大藏經要義續篇(其二).....	本
阿舍の人身觀(中之三).....	本
本多上人第七周忌報恩會	多
○本團の行事	日
清 水 姉 田 中 正 治 學	生
龍 山 本 多 賴 智 應	日
本 多 林 川 操	生
野 小 澤 林 一 郎	日
佛 吾 郎	生
木 村 高 島 平 日 保	日
本 鄉 三 郎 日 常	生
小 笠 原 長 生	日

財團一團趣意

本團署則



弟令御び及親兩御と人上多本

統一團へ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サマル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ産出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見シ又著述出版ニ於テハ大藏經略義 法華經要義 日蓮主義精要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進

ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行ゼント欲ス其中心ノ事業ヲ舉グレバ

第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ

テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一

ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明 研學ノ潤達 活動ノ旺盛

此等ハ統一團ノ標語ナリ

寔ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文

化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永

久ニ持続セントスル本團事業ノ眞贊ハ

最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ

同感ノ士女畜ツテ贊同アラン事ヲ爲

爲國爲一切衆生切ニ懸望スル所ナリ

◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シ

テ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ

培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スペク街頭布教並ニ

教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

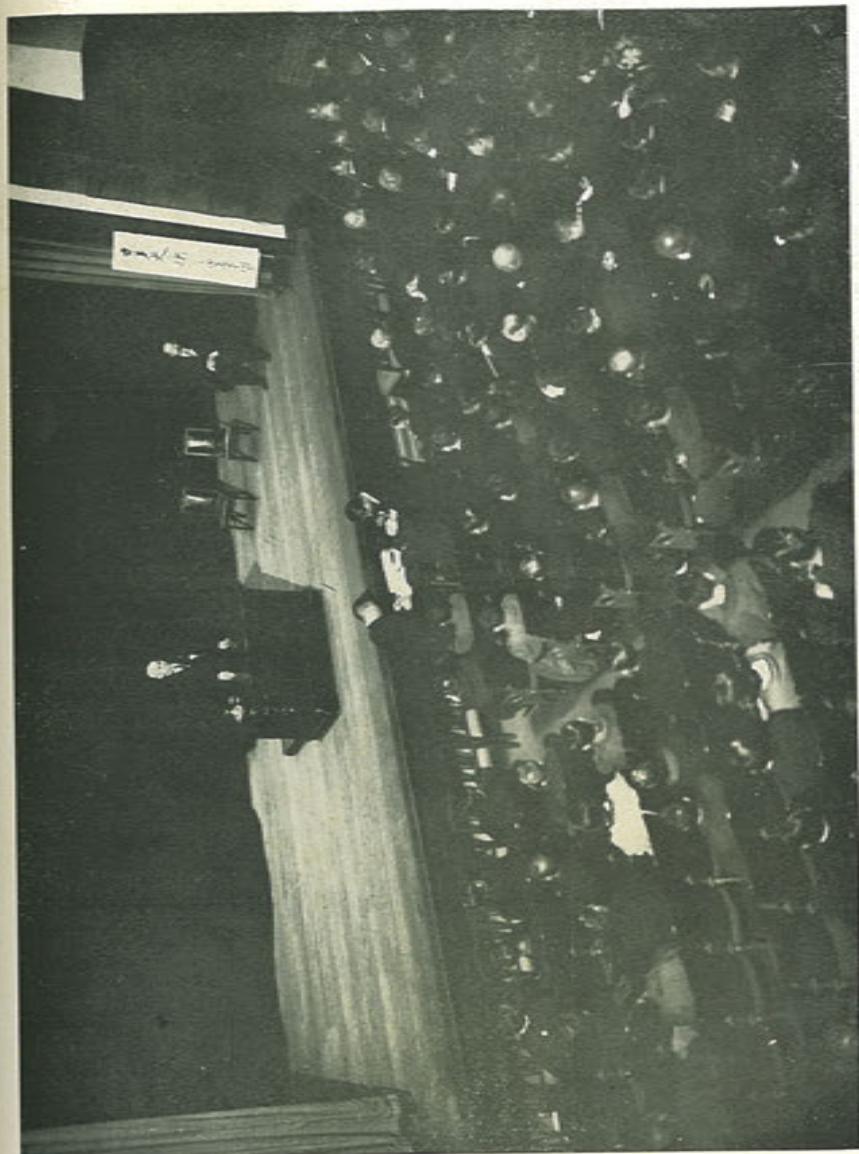
◎維持員 本團ノ事業ヲ實費シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス

◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス

◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ醸出セラル、方ヲ正團員トス

◎入團 御希望ノ方ハ宿所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルベ本誌ヲ無料ニテ頒布シ國章壹個ヲ贈呈ス

◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス



大藏經要義續篇

故本多日生譏

金光明最勝王經(其二)

往年本多上人が空前の一大誓願を以て、大藏經要義を隔月に刊行され、斯界の驚異讃歎の標となつたが、好事魔多く、其第十一卷に達した時、樅木日種師の遷化に依り一頓挫を來たし、遂に數年を徒費されてしまつた。偶々不思議といへば不思議であるが、因縁の熟する處か、大正十五年の夏頃より微力ながら此の梵業に從事する機會を與へられ、歎んだのも束の間、昭和六年の春、寢に悲しき日が來た。

此の數年間、日生上人の摘出された經典は一百七十六經、二千枚の遺稿に及んで居る。併し夫等に對して未だ 上人自ら註釋が附せられてない、何故かならば、經典を先づ全部摘出して其の總量を見、然る後之を七巻に纏め上ぐるやうに註釋を加減して初期計劃通り十八巻にせんとの御豫定であつたからなんである。四五年でこれだけの經文は、已前とは比較にならぬ程遅々たる次第なのは一つに御健康上と、他面それ程よい經典のなかつた事に歸すと謂つてよからう。或る者は註釋が無ければ價値がないやうにいふが、又それ程世間に知られてないものは必要もあるまいといふが、既に日蓮主義の立場から摘出された經文であるから、どんな經典でも心してこれを拜讀する時には自ら會通せらるべきことを確信し、且つこれを此儘に放鄭することは 恩師に對して、又以前の大藏經要義刊行會員に對して、更に遠く 佛祖三寶に對して相濟まぬことを想ひ、爰に關係者各位に諸つた結果、特に小林一郎先生の甚大なる御力添の上に、今回日生上人第七周忌記念事業の一として本月より適當に統一誌上に連載し、以て恩師の宿願を成満せしめんと發起する次第である。幸に各位の御清援を仰ぐと云爾。

昭和十二年春 日生上人第七周忌祥月に際して

磯 部 潤 事

善男子よ、一切の如來は三種の身あり、云何が三と爲す、一には化身、二には應身、三には法身なり。是の如き三身を具足して阿耨多羅三藐三菩提を攝受す。若し正しく了知せば速かに生死を出でん。云何が菩薩は化身を了知せん、善男子よ、如來、昔し修行地の中に在つて、一切衆生の爲めに種種の法を修し、是の如く修習して修行滿ずるに至つて修行力の故に大自在を得、自在力の故に衆生の意に隨ひ、衆生行に隨ひ、衆生界に隨つて悉く皆了別して時を待たず、時を過さず、處相應し、時相應し、行相應し、說法相應して種種に身を現す、是を化身と名づく。善男子よ、云何が菩薩は應身を了知せん、謂く諸の如來は、諸の菩薩の通達を得んが爲めの故に、眞諦を説く。生死と涅槃は是れ一味なるを解了せしめんが爲の故に、身見の衆生の怖畏と歡喜を除かんが爲めの故に、無邊なる佛法の爲めに本と作るが故に、實の如く、如如と如如智に相應し本願力の故に是の身現に三十二相八十種好、頂背の圓光を具するを得たり。是を應身と名づく。善男子よ、云何が菩薩摩訶薩は法身を了知せん、諸の煩惱等の障を除かんが爲めに、諸の善法を具せんが爲めの故に、唯如如と如如智とのみ有り、是を法身と名づく。前の二種の身は是れ假りに有と名づく。

【眞諦】 塗者の見る所の實義。

【如如】 正智所契の理。

【如如智】 如如の理體に美ふ理。

此の第三身は是れ眞實の有にして前二身の爲に根本と作る。何を以ての故に、法の如如を離れ、無分別の智を離れて一切の諸佛は別の法有ること無し。一切の諸佛とは、智慧具足して一切の煩惱究竟し滅盡して清淨の佛地を得たるなり。是の故に法の如如と如如智は一切の佛法を攝す。

復た次に善男子よ、一切の諸佛は自他を利益して究竟に至る。自ら利益すとは是れ法の如如にして、他を利益すとは是れ如如智なり、能く自他の利益の事に於て自在を得、種種無邊の用を成就するが故に、是の故に一切の佛法を分別するに無量無邊、種種の差別有り。善男子よ、一切の凡夫は三相の爲めの故に縛有り障有り、三身を遠離し、三身に至らず。何者をか三と爲す、一には偏計所執相、二には依他起相、三には成就相なり。是の如き諸相は解する能はざるが故に、滅する能はざるが故に、淨むる能はざるが故に、是の故に三身に至るを得ず。是の如き三相は、能く解し、能く滅し、能く淨むるが故に、是の故に諸佛は三身を具足す。善男子よ、諸の凡夫人は未だ此の三心を除遣すること能はざるが故に、三身を遠離して至ることを得る能はず、何者をか三と爲す。一には起事心、二

【用】はたらき。
【偏計所執相】凡夫の妄情にて一切を計度する、恰も蛇を認て蛇と爲すの類
【依他起相】因縁に依り生ずる一切の相。

には依根本心、三には根本心なり。諸の伏道に依り起事心盡き、法斷道に依り依根本心盡き、最勝道に依りて根本心盡くす。起事心滅するが故に化身を現することを得、依根本心滅するが故に應身を顯はすことを得、根本心滅するが故に法身に至ることを得、是の故に一切如來は三身を具足す。

善男子よ、一切諸佛は第一身に於て、諸佛と事を同ふし、第二身に於て諸佛と意を同ふし、第三身に於て諸佛と體を同ふす。善男子よ、是の初の佛身は衆生の意、多種有るに隨ふが故に、種種の相を現す、是の故に多と説く。第二の佛身は弟子一意の故に一相を現す、是の故に一と説く。第三の佛身は一切種相を過ぎて執相の境界に非す、是の故に説いて不一不二と名づく。善男子よ、是の第一身は應身に依りて顯現し得るが故に、是の第二身は法身に依りて顯現を得るが故に、是の法身は、是れ眞實有にして依處なきが故に。善男子よ、是の如き三身は義有るを以ての故に常と説き、義有るを以ての故に無常と説く。化身は恒に法輪を轉じ、處處に縁に隨つて方便して相續し斷絶せざるが故に、是の故に常と説く。是れ本に非ざるが故に大用を具足し、顯現せざるが故に説いて無常と爲す。應身は無始より來た相續して

【伏道】深く埋もれる眞金の開闢。

斷ぜず。一切諸佛の不共法、能く攝持するが故に、衆生盡くること無く、用も亦盡くること無し。是の故に常と説く。是れ本に非ざるが故に、用を具足し顯現せざるを以ての故に説いて無常と爲す。法身とは是れ行法に非ず、異相有ること無し、是れ根本なるが故に猶ほ虛空の如し、是の故に常と説く。善男子よ、無分別智を離れて、更に勝智無し。法如如を離れて勝境無し。是の法如如と、是の慧如如と、是の二種の如如、如如は一ならず異ならず。是の故に法身は慧清淨の故に、滅清淨の故に、是の二清淨なり。是の故に法身は清淨を具足す。

善男子よ、是の身の因縁、境界、處所、果は、本に依る、思議し難きが故に、若し此の義を了せば是の身は即ち是れ大乗なり。是れ如來の性なり、是れ如來藏なり。此の身に依り初心修行地の心を發することを得て、不退地心を顯現することを得、亦た皆一生補處心、金剛心、如來心を現することを得、而して悉く無量無邊の如來の妙法を顯現し、皆悉く顯現す。此の法身に依りて不可思議の摩訶三昧を顯現することを得。分別有りと雖も體に分別無し。三數有りと雖も三體無し、増せず減せず、猶ほ夢幻の如し。亦所執無く、

【不共法】佛の功德は他と同せざるないふ。

【不退地】菩薩初地の位。

【一生補處】佛位を絶ぐ處の菩薩。

【摩訶三昧】大禪定。

亦能執無し。法體如如 是れ解脱の處、生死の境を過ぎ、生死の闇を越へ、一切衆生の修行すること能はず、至る能はざる所、一切諸佛菩薩の所住の處なり。善男子よ、譬へば人有つて願ふて金を得んと欲し、處々に求覓めて遂に金礦を得、既に礦を得已つて、即便ち之を碎き、精き者を擇取し爐中に銷鍊して精淨金を得、隨意に廻轉して諸の鎌鉗、種種の嚴具を作る、諸用有りと雖も金性は改まらざるが如し。』

復た次に善男子よ、若し善男子善女人の勝解脫を求め、世善を修行し、如來及び弟子衆を見るところを得、親近することを得已つて、佛に白して言さく、世尊よ、何者か善と爲し、何者か不善なる、何者をか正修し清淨行を得ん。諸佛如來及び弟子衆、彼の問を見る時に、是の如く思惟す、是の善男子善女人は清淨を求めると欲す。即便ち爲めに説いて其をして開悟せしめむ、彼れ既に聞き已つて正念に憶持し、發心修行して精進力を得、蠻情障を除き、一切の罪を滅し、諸の學處に於て不尊重を離れ、掉悔心を息めて初地に入る。

是の如き法身は煩惱を離れ、苦集を除き已つて復た餘習無し。佛性、本、清淨なるを顯はさんが爲めの故に、體は無しと謂ふに非

【鎌鉗】腕環のこと。

す。譬へば虚空の煙雲塵霧に障蔽せらるるが如し、若し屏ゼを除き已れば是の空界淨し。空は無しと謂ふに非す、是の如く法身は、一切の衆苦悉く皆盡くるが故に、説いて清淨と爲す。體無しと謂ふに非す。

善男子よ、是の法身の惑障清淨、能く應身を現す、業障清淨能く化身を現す、智障清淨能く法身を現す。譬へば空に依つて電を出し、電に依つて光を出しが如し。是の如く法身に依るが故に能く應身を現じ、應身に依るが故に能く化身を現す。性、淨に由るが故に能く法身を現じ、智慧清淨能く應身を現じ、三昧清淨能く化身を現す。此の三清淨は是れ法の如如、不異如如、一味如如、解脱如如、究竟如如なり。是の故に諸佛の體は異有ること無し。善男子よ、若し善男子善女人有つて、如來は是れ我が大師なりと説き、若し是の如き決定信を作さば、此の人は即ち應に深心に、如來の身、別異有ること無きを解了すべし。爾の時に虛空藏菩薩、佛に白して言さく、世尊、若し所在の處に、是の如き金光明王、微妙の經典を講説せば、其の國土に於て四種の利益有り、何者をか四と爲す。一には國王の軍衆強盛にして諸の怨敵無く、疾病を離れ、壽命を延長し、吉祥安樂にして正法を興顯せん。二には中宮、妃后、王子、諸臣、和悅して諍フふこと無く、諂ハシマ侯を離れ王に愛重せられん。

三には沙門婆羅門及び諸の國人正法を修行して、病無く安樂にして枉死者無く、諸の福田に於て悉く皆修立せん。四には三時の中に於て四大調適し、常に諸天の爲めに守護を増加し、慈悲平等にして傷害の心無く、諸の衆生をして三寶に歸敬し、皆願つて菩提の行を修習せしめむ。是を四種利益の事と爲す。世尊、我等も亦常に弘經の爲めの故に、是の如き持經の人所在の住處に隨逐して利益を作さん。

夢見金鼓懺悔品第四

爾の時に、妙幢菩薩、親しく佛前に於て妙法を聞き已つて歡喜踊躍し、一心に思惟し還つて本處に至り、夜夢の中に於て大金鼓を見たり。光明晃耀として猶ほ日輪の如し。此の光の中に於て十方無量の諸佛、寶樹の下に於て琉璃座に坐して、無量百千の大衆に圍繞せられて説法を爲したまふを見るを得たり。一婆羅門ありて金鼓を桴擊して大音聲を出すを見たり。其聲の中に微妙の伽他を演説して懺悔の法を明かす。妙幢聞き已つて皆悉く憶持し、繫念して住す。天曉るに至り、無量百千の大衆と圍繞せられ諸の供具を將て王舍城を出て鷲峯山に詣て、世尊の所に至る。

佛に白して言さく、惟願くは世尊 大慈悲を降して、我が所説を聽したまへと。即ち佛前に於て頌を説いて曰さく、

我れ昨夜中に於て

金光明の鼓は妙聲を出し

能く三塗の極重罪及以び

此の金鼓の聲の威力に由りて

怖畏を斷除して安隱ならしむ

若し是の妙鼓の音を聞くことを得ば

或は自ら尊高と

盛年とを恃み放逸を行ひ

心恒に邪念を起し

過罪を見ず

是の如き衆罪を作りぬ

無知にして正法を謗じ

我れ今悉く懺悔す 父母に孝せず

夢に大金鼓を見たり

徧く三千大千界に至り

人中の諸の苦厄を滅す

永く一切の煩惱障を滅し

即ち能く苦を離れて佛に歸依す

種姓と及び財位と

常に諸の惡業を造り

口に惡言を陳べ

我れ今悉く懺悔す

我れ今悉く懺悔す

我れ今悉く懺悔す

我れ今悉く懺悔す

我れ今悉く懺悔す

我れ今悉く懺悔す

我れ今悉く懺悔す

我れ今悉く懺悔す

爾の時に世尊此の説を聞き已つて、妙幢菩薩を讀へて言はく、善い哉 善い哉と。

金光明最勝王經卷第三

滅業障品第五

我が業障、今亦た懺悔し、皆悉く發露して敢て覆藏せず。已作の罪、願はくは除滅することを得て、未來の惡は更に敢て造らず、亦た現在十方世界の諸大菩薩、菩提の行を修し、所有の業障は悉く已に懺悔するが如く、我が業障今亦た懺悔し、皆悉く發露して敢て覆藏せず。已に作れる罪は願くは除滅することを得て、未來の惡は更に敢て造らず。

善男子、若し人四法を成就せば、能く業障を除き永く清淨を得ん。云何んが四と爲す。一には、邪心を起さず正念を成就す。二には、甚深の理に於て誹謗を生ぜず。三には、初行の菩薩に於て一切智の心を起す。四には、諸の衆生に於て慈無量を起こす。是を四と爲すと謂ふ。爾の時に、世尊、頬を説て言はく、

専心に三業を護り

深法を誹謗せず

一切智の想を作し

慈心もて業障を淨めよ

阿含の人身觀

(中之三)

故大僧正 本 多 日 生

併しさういふことは言ふけれども、菩薩であるとか佛の心であるとかいふやうな、さういふ大乗にある精神が阿含には無いではないかと言ふ人があるけれども、これも私は間違つて居ると思ふ。阿含に於ては菩薩行といふものは盛に説かれて居る。その事は又後に行といふことを論する場合に詳しく述上げて見やうと思ふ。さうして佛の子といふ思想もハツキリして居るのである、別譯雜阿含の中に、

世尊告げたまほく、無上の良醫として毒箭を抜かん、汝等は皆是我の子なり、悉く我が心口よりして生ず、是れ我が法子なり法化より生ず。

佛は専いお醫者様であつて、衆生が毒箭に射られて居る、その毒箭を抜いて痛み苦しみを助けてやるが如きものである、どうして佛は左様に親切に毒箭を抜いてやるのかと言へば、實はる前等は我が子である、我が教の中から成長して行くところの可愛い子であるといふことを言はれて居る、茲にハツキリ汝

等は皆これ我が子なりとある。

尙雜阿含の中には、

佛子は佛口より生ず……我是是れ佛子なり、佛口より生じ法化より生じて佛法の分を得たり。

といふやうに佛子といふ言葉は澤山使つてある、これは目連尊者が申した言葉であるが、我是佛子である、ちょうど王様の子がそんなに偉い働きをせなくとも、人も頭を下げ、自分も幸福な生活が出来るやうに自分は佛様の子であることに依つて、自分の努力よりもより多きものを報ひられる、それは佛様のお蔭である、總てが自力の結果ではない。王の子が王の威徳を以ての故に、その太子の働き以上に人が尊敬し、實力以上の幸福を受ける、我等佛子は佛の威徳を以ての故に、自分の働きより以上の幸福を受け功徳を得て、人からも尊敬せられ洵に有り難いことである、これが佛子の光榮である。佛子の有り難味であるといふことを目連尊者が申して居るのである。又増一阿含の中にも、

是の如き弟子の華は佛道の樹を莊嚴せん、弟子の華とは即是れ舍利弗比丘是れなり。

佛の弟子は佛の子である、他の人も佛子であるけれども就中舍利弗は佛様の樹に咲いた華である、佛様を菩提樹に譬へて、その菩提樹に咲いたところの美しい華である。それは佛弟子なり信者なり澤山の人

人に依て鬱然として大きな樹に綺麗な華が一ぱい咲いて居るのが佛教の宗團である。

斯様にして佛子といふ言葉は阿含に於ても盛に使つてある、この佛子といふやうな言葉は非常な自分の尊さを發見して居るものである。殊に佛の樹と言ひ、吾々を佛の華に譬へた事の如きは實に綺麗なものであつて、人間は決して埃溜ではない、佛様の樹に咲いた華である。茲に例に引くのは如何かと思ふが、我が皇室の天皇陛下から軍人に賜つた勅諭の中に「朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を頭首と仰ぎてそ」と仰せられて居る。ちょうどさういふ風に釋迦牟尼は佛道の樹であつて、我等は佛子としてその樹に咲いたところの菩提の華である。斯の如き事は決して人間自身を罪惡の一方に見て居ないことが洵に能くわかる。

それから婦人に關しての事を御紹介して置かうと思ふ。これも既に人といふことで佛子の中に入つて居るのであるから宜いやうな譯であるけれども、前に言ふやうな意味に於て特別に佛教或は儒教その他日本の武士道等に於て女性といふものを侮辱して、日本の社會風俗、傳統觀念の中には今猶ほ女性に対する正當な思想を有つて居らぬ、これは非常な間違つたことである。女子が政治上の權利が平等であるとか、職業上に於て男子と對立するとかいふやうなことは、これは第二第三に屬することであつて、第一人格の根本に於て、宗教で扱ふところのその價值の上に於てどうであるかといふことをハツキリしなければならぬ。その方に於て思想信仰が確立せずして進んで行くといふことは非常に順序が違つて居

ると思ふ。であるから私は佛教の如き偉大なる教が女性を如何に解釋して居るか、これが儒教や武士道やその他の道學の書物などを見ても何の参考にもなりはしない、又西洋の思想も少しも参考にはならぬ、西洋の婦人問題はたゞ権利といふやうなことを言つて居るのであるから駄目である、モツと深い哲學宗教の根柢から女性といふものを解釋しなければならぬと思ふ。

別譯雜阿含經の中に

女人の意聰にして法を聞いて信悟すること新淨の毘の染色を受け易きが如し。

女といふものは心の働きが洩にすゞやかに能く働いて、我が教を聞いて信じ且つ悟ることは、新しい眞白な綺麗な毛氈、何の穢れもない毛氈に新しい模様を染め出しが如くに、我が教の儘に女性の心には教が映る、新淨の毘といふのは新しい綺麗な毛氈といふことで、これに唐草模様なら唐草模様を染め出さうとすれば如何なる模様にでも自由に染まるが如く、女性の心には我が教はハツキリと映すると言はれて居るので女の心は善い事を教へたならば水の上に文字を描くが如きものだなどと言ふのとはまるで違ふのである。それは佛の教を忘れたデモ坊主の言ひ草である。女の心がどうだといふやうなことに就て釋迦牟尼の教を忘れて、たゞ名を釋迦に藉りて婦人を侮辱したものである。それはデモ坊主が社會觀念の提灯を持つのである、今日でもだん／＼世の中が無產階級といふやうなことを言ひ出すと、腰の弱

い宗教家は皆その提灯を持つてキヤン／＼飛出す。そのやうに、社會が女性を侮辱して居つた時代にその提灯を持つて言ひ草に過ぎない、家庭に入つても親父は威張つて居つて妻君は小さくなつて居る、そこへ行つて女を褒めるやうなことを言へば主人の御機嫌を損するやうに思つて『女といふものはどうしても罪の深い者だ』、『さうだ／＼、それに違ひない』といふ風に、時の社會の潮流に迎合したものがである。今日以後はさういふ譯にいかぬ、女性なら女性が餘りに突飛な事をすれば、宗教はこれを抑へなければならぬけれども、從來の傳統觀念に誤りがあれば穩健な思想から宗教の方に於てこれを是正して行かなければならぬ。その際に釋迦牟尼の女性觀といふものは斯様にハツキリして居るのである。それ故に增一阿含經には佛弟子の中の婦人、即ち尼さんであるとか、娘であるとか、奥さんであるとかいふやうな人が佛教を信仰して働いた事柄の各々の特色が澤山舉つて居る、これは特別なる點ばかりを擧げて居るので、この他にもそれ／＼美點があつたけれども、その人の特別に光つて居る點を擧げてある。その幾つかを一人で兼具へ、或は互に相照し合つて、それ／＼の光があつただらうと思ふが、それは實に立派なものである。

智慧聰明なるは識摩比丘尼是れなり。

智慧聰明と言つて非常に賢い尼さんがあつた。

天眼第一にして所照無礙なるは奢拘梨比丘尼是れなり。

天眼第一と言つて今千里眼のやうな神通力に達して居る尼さんがある。

義趣を分別し廣く道教を演ぶるは波頭蘭闍那比丘尼是れなり。

物の意味合、教の事柄を研究して演説や説教の上手に出来る尼さんがある。

四辯才を得て怯弱を懷かざるは最勝比丘尼是なり。

非常に修辭學に達して辯論の上に勝れて居る、又ただ口ばかり上手ではない、論理の上に確からした知識を有して居つて、何處へ行つても畏れを懷かないで婆羅門であらうが、世の俗人であらうが、これを折伏して釋迦牟尼の教の感化を徹底せしむる比丘尼があつた。

外道を降伏して立つるに正教を以てするは輸那比丘尼是れなり。

外道婆羅門の方の思想を打破つて、如來の正しき御教を弘めて下り、佛教を宣傳して行つた尼さんが

あつた。

能く雜種の論に亦疑滞なきは檀多比丘尼是れなり。

佛教ばかりでなく様々の婆羅門の教であらうが、天文學、地理學といふやうな世間のいろいろの學問に關しても、どの書物を持つて來てもそれ等の思想家に對抗して立派に佛教の思想を教へて行く尼さんがあつた。

偈を造りて如來の德を讃するに堪任なるは天與比丘尼是れなり。

偈即ち讚美歌をつくつて、美しい言葉を以て如來の德を讃嘆することに非常に勝れて居る、「今日は何處に斯ういふ會があるから新しい讚美歌をつくつて呉れ、舊い讚美歌ではモウ感興を惹かないから、少し方の違つた事で如來の德を讃嘆して呉れ」、「承知しました」といふので直ぐ美しい偈をつくつて呉れる美文家も居つた。

多聞博知にして恩惠もて下に接するは瞿卑比丘尼是れなり。

多聞博知と言つていろ／＼の書物を研究しいろ／＼の事を知つて居り、而も優しく人を思ひやつて目下の者に接する、自分が物を知つて居るからと言つて決して慢心をしない、優しい心を以て身分の軽い者に接して、あの人は佛法のことにも精しいけれども親切な人だと言はれるやうにして宣傳を助けた尼さんもあつた。

遍行乞求して廣く人民を度するは摩怒訶利比丘尼是れなり。

遍行乞求と言つて草鞋懸けで方々へ出懸けて、僅かの菜の餘つたものでも、紙の舊いのでも構はずそれを貰つて錢に換へて施しをし、或は襦絆の悪いのや、靴下の破れたのを貰つてはそれを縫つて困つた人に施した、今の社會救濟事業のやうなことに努力した尼さんもあつた。

速に道果を成じて中間に滞らざるは陀摩比丘尼是れなり。

一方には非常に宗教的に修養訓練を積んで宗教の信仰に依つて人格を磨いて立派な人になり、「私は信心を始めてまだ僅か一月であるけれども、信仰の徳に依つて斯うなりました」と言つて、臨眼も振らずに佛教の修行の效果を現して世人をして驚嘆せしめた尼さんがあつた。

多く慈に遊んで生類を愍念するは清明比丘尼是れなり。

動物愛護會のやうなものを設けて、人を可愛がるばかりではない、馬や犬を酷い目に遭はせてはいかぬと言つて動物を可愛がる、蛙が道に怪我をして居つてもアア可哀さうにと言つて手當をしてやる、子供が蜻蛉を捉へて羽をちぎらうとして居れば「あ、お待ちなさい、可哀さうに、その代りにこのお菓子を上げますから」と言つて、子供が生物を殺すのを止めて歩いた尼さんがある。

得道者を喜び願ふて一切に及ぼすは摩陀利比丘尼是れなり。

得道者を喜ぶといふのは、佛教に來て信仰をした結果、それに依つてその人の人格が立派になつたといふ人があると、非常に喜んで直ぐにその人の所に出懸けて行つて、「あなたは信仰に入つて信心もし、人格も善くなり立派になつたさうだが、實に結構な事です」と言つて奨励して歩く。さうしてどんな遠い所にさういふ人が在つても一度も缺かしたことは無い、信仰をきめて立派な人になつたといふことを聞いたならば、直ぐにその人を歴訪して「一旦きめた信仰は動搖してはいけませぬ」と言つて止めを刺して歩いた。今日は雨が降つたからやめたとか、去年はやつたけれどもこの頃はやめたといふやうなことは無い、何時でも貫して新しい道に進んだ人を喜んでその志を策勵して歩いたといふ尼さんがあつた。

無願を修習して心恒に廣濟なるは末那婆比丘尼是れなり。

無願を修習するといふのは自分に求める所無く、非常な高遠な思想を以て、自分は何にも私する所無く、囚はれたる所無く伸び／＼した精神から人に向つて、佛法を信する者はこのやうに氣分ののんびりした穩かなものであります、さうコセ／＼ガチャ／＼すべきものではないといふ模範を示して、人格の穏かな所を以て多くの人が「成程あなたのやうな氣分に成れるならば、私も佛教を信心して見ようと思ひます」といふやうに、人格の光を以て人を濟度した尼さんがある。

諸法に疑ひ無く、人を度すること限り無きは毘摩達比丘尼是れなり。

どんな佛教の話が出ても能く知つて居つて、又世間の事柄に就ても解釋を上手にする、その話を聽けば誰でも感服して濟度を受けたといふ尼さんもある。斯ういふ風にして一々算へ擧げて行くと非常に澤山ある。殆ど數限りが無い譯であるがモウ一つ擧げるならば、

水三昧に入つて普く一切を潤すは婆須比丘尼是れなり。

水三昧といふのは水の因縁から道を弘めるので、例へば一パイのコップの水がそこに在れば、この水があれば喉の渴いた人も教はれ、枯懸けた草も教はれる、菊なら菊の花がダラツとして居つても、水をやれば又頸を持ち上げる、その如くに我は水の如き人になつて如何なる弱つて居る者でも、頸をダラツとして居る人間でもその悲しみを除いて、ちょうど枯懸けた草に水をやつて活き／＼さすが如くに、人々をして喜びを得せしめたいといふことを何時でも一本槍に思つて居る、さうしてそれが非常に上手につて居るものであるから、モウその人は水三昧といふものを得て居る、一種特別なる力を以て「あなたの心に水の如く……」とやり懸けると、モウ對手が非常に氣持良く感するやうな特殊な力を有つて居る。心配をして居る人を見れば「私は枯れ懸けた菊の花に水をかけて勢ひを附かすやうに、あなたの心をひらいて上げます」と言はれると、如何にもスツと心のひらいたやうな氣になる、さういふ力を得て居る尼さんがあつた、その反対に、

餓光三昧に入つて悉く萌類を照すは降提比丘尼是れなり。

今度は餓光三昧と言つて火がカツ／＼と燃えて居るやうなことに自分の精神を專注して現した。それは眞暗の所に炬火を焚いて行く光明の方から言つたのであつて、如何なる暗い所にも光を與へるが如く、あなたの心の暗闇を除いて上げませうと言つて人の精神を照した尼さんもあつた。斯様に一々の特色を有つた二百人からの實例がズツと擧げられて居るのである。（次續）

本多上人第七周忌に

日 常 謹 詠

七年の月日は経れど師を思ふ

心は更に新なりけり

師在まさば待つこと多き時なるに

などて早くも逝き給ひけん

何人も惜まぬものはなかりけり

世にも稀なる偉大なる師を

教へ子は心あはせて法のため

尚ほ一すちに勵まさらなん

妙國寺墓畔静かに聲なきも

世は騒かしき非常時かな

本多上人第七周忌報恩會の記

本部團報

人間は生前にチャホヤともて囁される人もあり、却て死後に益々輝を増す人もある。併し人の真價は棺を覆ふて後に定まるといふことがホントだと思はれる。本多上人の滅後、世の中は急激に回轉せるかの様に感する、而して聯盟を離脱し、又軍縮が破棄されて建艦競争になり、各々闘争の氣分が濃厚に浮び出されて來た。それは佛教に示せる四劫の中、第三の破壊時代に向ひつゝあるもので、心ある者の憂慮に堪えぬ次第である。誰が之を救護するのか、佛徒の責任は重大である。「魚は水を離れては死す、人教なれば禽獸に同す」今更ら乍ら正しい根強い慈悲深い、佛陀の形聲二益が偲ばれてならぬ。

それにしても法は獨り弘まらず、之を弘むるは人ありなんだが、折角貴い佛教がかくれて現はすに

人がない。本多上人が居られると何う成さるでしやう、本多上人々々々々といふ聲が教界に響いて居る。三月は早くも其第七周忌をお迎へするのであるから本年は門下の僧俗有志一同が發起して、一番盛大な報恩會を營みたいものであるといふので、夫れく關係方面に交渉を重ねたが、不徳の致す所、完全一致を見ることなく、漸く「本多上人第七周忌記念會」として全部の賛同を得たが、宗門の緣故者は自由行動に出ることの止むなきに到り、從つて日生上人棲神の道場たる本團に於ては、三月十三日、日生上人御誕生の當日午後二時より、會館階上の莊嚴された御寶前に於て、小西僧都を導師として、和賀、山口、齊藤、等の諸師、別座に釋真誓師等、而して

妻、石橋申蔵、佐藤三義重役、力石氏や、林氏、加

井猪、大庭、伊藤、山川、田中、山口等の代表

が、當日は恵まれた氣温で、午後四時から前號豫告

の通り有樂町鶯絲會館に於て、日蓮門下の僧俗選り

すぐつた四十三名を以て發起された近年珍らしい記

念會が開催された。

會が會だけに定刻に寸秒の相違もなく正四時、木

村顯本法華宗管長大導師となりて、法味を捧げ、笛

川前管長、鈴木權大僧正其他三上、齋藤、和賀、山

口等の顯本側、本門の神田師、本妙法華の釋師、若

千遅れて日蓮宗の清水、柴田、稻田、小野、諸師、

本門法華の三吉師、國柱會の田中、山川兩氏の代表

及び今は特に遙々大阪立正青年團より五名の代表

並に福島統一團支部代表等、遠路をものともせず參

列されたのは一入感憤せしめられた。御遺族は申す

迄もないが、御在京の御親戚のみならず遠く大阪か

ら友廣御一家三人迄も隨喜御上京された、事程左様

に大切な日生上人第七周忌なんである。日蓮宗では



記念會報

藤氏等を始め本團の幹部、團員諸氏、遠く千葉及横濱等より隨喜參詣の大衆と目白押しに着座し、型の

如く心からの大法要が虔修されたのであつた『此師に隨順して學せば恒沙の佛を見たてまつることを得ん』又云く『善知識は是れ大因縁なり、所謂化導して佛を見、阿耨多羅三藐三菩提の心を發すことを得せしむ』と、恩師は靈山よりかへりて吾等を導き給へるか、正面の大寫眞は今にも何事をかお話しになりさうに拜された。名香の薰いとも靜かに立ちのぼるも、在せし日をぞしのぶ。

大法要も滞りなく、一同の赤誠を捧げて後、三々五々自動車に分乗して一路品川鳳凰山の墓域へと馳せ付けた。そこには今朝吾等の新らしく獻華されたすが／＼しい光景の中に、各自の心からなる讀經、唱題の御回向に、かくお墓を目前にしては再び新たな感激迫つて容易に立ち去るに忍びない。この名残りを一枚のカメラに収めて『皆様有難う存じました』と繰返へしたのは正に五時であつた。

○
さわがしさ世に静かなり豊眠る
詠るたび心にきざむ墓誌のあと

恰度宗會開催中で、望月管長、富川總監及び馬田教學部長等、どうにも參列が出來難いといふので、本望主事を態々代表せしめ香資を供へられ、國柱會の田中芳谷氏がお忙しい中から特に嚴父の別掲御心唱偈と香資を供へられ、又山川博士の和歌と厚き淨志を奠せられたことは寔に熱淚を禁じ得ない。恩師に對する情操の細かなるは實に其範國柱會にありと美望の至りである。延山御書に『實に佛に成る道は師に仕ふるには過ぎず』を如實に勵行されて居る處に生きた教は躍動して居る。口に怜悧氣な理窟や、教學の蘊奥を究めて居るといつても、事實の上に示されないやうなことでは三文の價値もあるまい、教家は寧ろ不言實行を貴ぶ。兎も角 釋尊にも提婆あり、日蓮聖人にも三位房あり、すべて因縁の然らしむる處であらう。

莊嚴な法要、至誠の燒香が一區割されて後、織原廷行氏の献笛『虛空鉛幕』の一曲は徐ろに斷腸の感

を深からしめ、餘韻蕭條として書きない。引續いて金子宗匠の賣生流謡曲と仕舞に、心も恍惚として俗

界を忘れ、嘸や日生上人もお歎びの事と、忍びやかに正面のお寫真を凝視した。

本多大僧正牌前恭獻香 心唱小偈

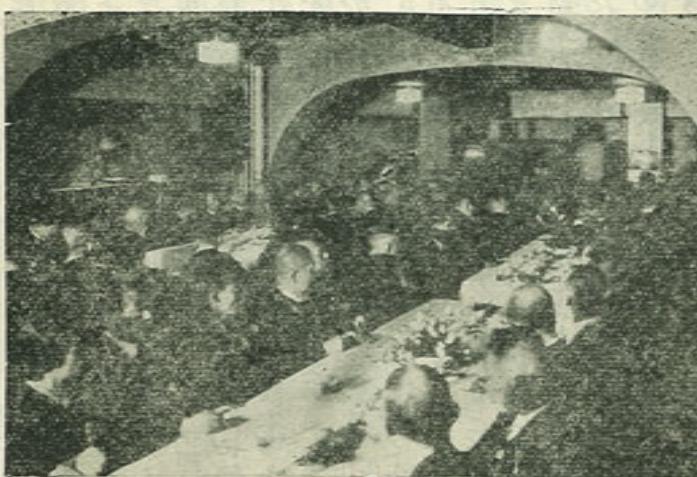
仁逝界及七霜星
煩累事憶未熟成人
綜時來機不看惑
英靈天倒護斯

昭和十二年三月十四日

辱知智學道人判在
虔香

聖應院上人 九つのなかれあはさむねかひをは
七回忌に なほねきまさむ鷺の山にて 智應

聖應院師の ありし日のひろやかなりし面影を
七回忌に 健ふにたえぬ春の夕暮 智應



川智應院、松木喜八郎、松木持、毛見春吉、福原脩、

晩登 正五時、豫定の通りテーブルが開かれて、御遺族を主賓に、其左右には一二の御親戚が着座されあとは宗教的に上下の距もなく各位隨意に御着席を願つた。その御顔振れをいろは順に擧げると、
井上清純、井上一次、石橋甫、稻田海素、岩野直英、市原求、井上道太郎、伊東竹三郎、石川隆一、池ノ内三雄、伊藤和歌、池田新一、磯部満事、林頼三郎、本多熊太郎、本郷常次郎、北條平太郎、本田健二、星一、友廣壽美、友廣かじ、友廣和子、富川玄快、(木室頼蔵)、沼部彌太郎、沼部繁野、沼部清、小笠原長生、小野鍊雄、大野良敷、大野義夫、織原延行、大谷權次郎、小田五一郎、尾崎熊吉、和賀謙介、綿引弘、加藤豊三郎、神田眞道、金森春松、神田彦三郎、河合勝明、河合登美子、金子光和、貝塚敏二郎、横山正三、田中芳谷、田中道爾、田中毛武、高島平三郎、高木清隆、中川日史(大泉市蔵)、中山喬二、中野昇、中野溪子、中村清兵衛、中村清一、中村美津、中村のぶ子、中村光三郎、名越猛熊、上田辰卯、宇野博順、馬田行啓(代)、野澤悌吾、野澤一郎、山田三良、山田繁子、山岡日紹、山田英二、安江清海、山

福岡駒雄、小林一郎、小林長次、小林順義、小林啓善、寺尾與三、姉崎正治、青山信市、秋澤吉藏、笛

實行委員 小林一郎
司會者

川日堂、酒井日慎(石川謙吾)、斎藤昭行、佐野忠吉、
酒井藤吉、佐藤梅太郎、木村日保、木村敬之、木田
芳雄、三上義徹、三吉顯隆、清水龍山、釋真誓、柴
田一能、武田武治、同夫人、篠崎又兵衛、清水美佐
下妻よし子、百々瀬芳次、關原忠三、妹尾元義、鈴
木日雄、鈴木英夫、鈴木宇多子、大阪立正青年團井
上元吉、徳永信、東峰太郎、清原淺治郎、平山健治
等々の諸氏であつた。

御申込の締切り十二日迄の分は約百名計りであつたから、その積りで用意したのが急に激増したので實行委員の方は相當にまごついたけれども、これは至極有難い事で歎びに堪へない次第であるが、各位には隨分と窮屈で、御迷惑をお懸けした事と謹んでお詫を申上げる。

デザートコースに入つて次の通りティブルスピーチに華が咲き重ふた、宴に有難い事と感謝に言葉も筆も盡せぬ。

今更に教化の徳の有がたさ
この盛儀窓かに涙拭ひけり

發起人を代表すると申しては甚だ僭越であります
が、發起人の一人と致しまして、一言御挨拶申上げ
たいと思ひます。先づ本多上人の御遺族のお方々に
對しまして、今日態々お出でを願ひましたことの御
禮を申上げます。上人御遷化以後モウ七年経ちます、
御遺徳を慕ひます者共が集りまして、洵に簡単なる
催しではございますが、誠心を以て故本多上人の御
偉徳を追憶致しまして、御生前に受けました御恩に
報いたいと存じて、斯様に集りました次第でござい
ます。お忙しい中をお出でを願ひましたことを一同
寃に有難くお禮申上げます。

今日は實は百人前後のお方のお集りと存じて計畫
致しましたところ、御生前の御徳を慕ひます人々が
多い結果と致しまして、豫定よりも遙に人数が殖え
ました、これは全く故日生上人の御遺徳の然らしむ
るものと存じまして、今更ながらに有難いことに存
じます。

次に御來會の皆様方に御禮申上げます。本日私共

の禮三君が、法の爲、道の爲に力を盡し下さるや
うにお力添の程を重ねてお願ひ申上げて置きます。

一言御挨拶を申上げます。(拍手)

それではまだ私からお願ひして恐縮でありますが、顯本法華宗管長木村上人より一言のお話を願ひます。

顯本法華宗管長 大僧正 木村日保

不行届の者が斯様な催しを致しましたところ、お忙
しい中をお縛合せ御來會下さいまして、斯の如き盛
んな會合の出來ましたことは、洵に大勢の方々の御
同情の然らしむる所と存じまして、謹んで御禮申上
げます。たゞどうも發起人たる私共一向行届きませ
ん、殊にお席の順序なども一向解りません。失禮に
失禮を重ねて居る譯であります。この點をお許しを
願ひたうございます。

折角のお集りでありますので、今三四十分の間、
二三のお方の御所感をお漏し願ひたいと存じます、
甚だ差出がましいことであります。私からお願ひ
を申上げましたら、どうぞお断りなくお話をお願ひ
致したいと存じます。

終りに一言申添へたいのは、本多上人の御令息禮
三さんが、特に御出家の志を立てられまして、本多
上人の後をお繼ぎになるといふことであります。こ
れは洵にお目出たい事であります。併ながら御當人
に對して甚だ差出がましいことであります。まだ
年若いことでありますから、どうぞ御來會の皆様方
が故土人に對すると同じやうなお心持をもつて、こ
とだと考へるのであります。

餘りに自分の畠から本多上人の追憶を申上げることは、この場合に於て恐縮でありますので、たゞ御来會の方々に對しまして、洵に大勢お集り下さつたことを感謝致しまして、責を塞がして戴くこと、致します。（拍手）

○司會者 姉崎文學博士がお出でになつて居られます、外國にお出でになる前といふお忙しい所を、特にお縁合せ御出席を願つたのでありますて、有難たう存じます、どうぞ一言の御感想を載さたいと思ひます。

文學博士 姉崎正治

私は最初の豫定にしますれば、實は今日出る船に乗つて、豫定通りにすると、今頃は駿河灘に在る次第であつたのでありますて、延ばしましたので參會する事が出来まして、一言御挨拶を述べる機會を得ましたことを感謝致す次第でございます、有難うございました。

本多上人の學徳の深いことに就ては申す必要もないと思ひます、私との關係方面に於て、初めの時代

を殊に御勉強になつて、これは西洋の方ではどう考へて居るか、それと我が法華經とはどういふ關係にあるかといふ點に著眼をされたのであります、私の翻譯したハルトマンの宗教哲學を選ばれたのはどういふ譯か知りませんが、日生上人は殊にそれを御勉強になつたのも偶然ではないと思ひます。私があの書物の翻譯に『具象一元論』といふことを書いてある、今日でもさういふ譯語は無茶苦茶に出ますがその頃吾々が勝手に持へたのであります、例へばあの中に出て居ります『契機』といふ言葉があります、それは獨逸語のメントといふことを譯したのであります、この頃は新聞の言葉でも何でも、何が契機で内閣が顛覆したとか、さかんに使はれて居りますが、さういふ言葉を日生上人はよくお使ひになつた。さうして今の具象一元論といふ、私が翻譯したその意味が、よほど法華の諸法實相論、茲に一乗の理想に似通つたものがあるので、よほどそれをあこなしなつたやうに思ひます。それでありますから、今私が自分の翻譯を読みますと、自分の翻譯した日本語では解らない、専ら原文を讀んだ方

が解るのであります、それを原文を見ずに、翻譯で勉強なさつた日生上人が、よくその内容を徹底して見て居られたといふことは、これは法華の素養があるからでもあります、如何に社會方面に、所謂知識を世界に求めるといふ方に熱心であつたかといふことの一端が現れて居ると考へます。例へばその中に、その書物だけではなく吾々もよく使つた言葉で『對象』といふ言葉があります、信仰の對象といふことの一端が現れて居ると考へます。そこで私が妙圓寺へ参った時に、仁王門を潜らうとして見ますと、仁王門の仁王さんに上げてある草鞋の横に札が懸つて居つて『仁王尊は信仰の對象に非ず』といふことが書いてある。これは日生上人が掲示されたので、そこまで應用された。併し仁王様へ草鞋を上げに来る人達が、あれを讀んで意味が解つたや否やはそれは問題でありますが（笑聲）それほど熱心でありであつた。その他追憶しますればいろ／＼出て來まするが、私共の方から見て、學に熱心なる知識のみならず、見解・見識を深めることに熱心で

のこと、本多上人の用意と申しますか、仕事の仕事學問の仕事の一端に觸れた點を一寸申上げたいと存じます、既にお話をしましたが、それは私が學校を出ました頃は、上人が大分活動して居られて、四箇格言の問題の頃よりも數年後であります、御活躍してお出でになつた。さうしていろいろ又學問上の新しい言葉を用ひてやつて居られる時であります、私がハルトマンの『宗教哲學』といふ書物の翻譯を出したことがあります、それから何年後でありますか、數年後に初めてお目に掛つて知己になつたのであります、その時——それから以後知つたことであります、そのハルトマンの宗教哲學を最もよく勉強して理解した方は日生上人であつたらうと思ひます。數年経つてから日生上人に私がお知己を忝うしてその話が出る、さうして時に依ると、あの場所に斯うあるが、あれはどういふのだと質問されると、翻譯した本人自身はモウ忘れて居るか、若くは解らずに翻譯して居つたものをそれを通して日生上人の方がよく知つて居られたので、實は少々困つたこともあります、併しあの書物

徹底して居つたことに感服して、それに依つて吾々も亦刺戟を受け、誘導を受け、感激を受けたこと静からざることを思ふ次第であります、上人御逝去後七年経ちましても、追憶は更に盡くる所を知らない。今日此處に大勢の方々と共に、追憶の一端を述べ得たことを甚だ幸ひととする者であります。(拍手)

○司會者 天晴會創立以来の會員で居らしやる林頼三郎先生が、今日懇々お出でになりましたので、この機會に於て一言御感想を承りたいと思ひます。

前司法大臣 林 頼三郎

何か感想を述べよといふ御指名を受けましたが、皆さんも御承知のやうに、私は佛教の方を別段研究したことありません、また先程も此處でお隣りの方とも話して居つたのですが、實を言へば私の家の宗旨は淨土宗であります。さういふ方面から或はさう深い縁故がないやうな風にも見られるのであります。實はフトした事から本多上人に十數年前に初めてお目に掛ることを得まして、それ以來た

私が特に本多上人に就て感じて居りますことは、上人は如何にも信念の方で、勇氣に満ちて、さうして實行力に非常に強い方であつたやうに思ふのであります。今日の内外の情勢は、私の申す迄もないことであります。鬼に角我國は非常なる難局に際會して居ると言はれて居る。斯ういふ際に、正しい道を以て上人の如く強き決心と、勇氣と、實行力を以て秉切るといふことが大切な事柄ではないかと思ひますので、特に上人を憶ふの切なるものがあるのあります。このことを一言申上げて私の追憶の辭と致します。(拍手)

○司會者 本多上人御生前に於きました、非常に深い御縁故がありました野澤少將がサヨウドお見えでありますから、御生前の事に就て何かお話を願ひたいと思ひます。

陸軍少將 野澤悌吾

本多上人の恩徳に付きましては、本日統一閣でも木村猊下から非常な詳しいことを拜承しました。モウあれ以上私から申上げる餘地はない考へます。私が本多上人に近接を致しました動機は、最初國體の事を研究して見たいと思ひまして、軍隊の教育は國體を根本にした精神教育をしなければならぬといふことから、舊い書物をいろ／＼集めて居りますと、田中智學先生の御著述を拜しましたが、頗る難解で、私のやうな鈍い頭腦ではなか／＼理解が出来ません。その後仙臺に参りましたものが、表題は忘れました際に、地方で講演に來て呉れと頼されました、他に申すこともありませんから、自分が平生關心を有つて居りました國體の本義に就て話をしようといふことで、頻りに書物を讀んで居りますと、師園副官が一冊の本を持つて來まして、是は本多上人が北海道で御講演になりましたのですが、表題は忘れましたが、慥か『軍人精神』といふやうな題であつたかと思ひます、バンフレットとしては少し厚い、

書物としましては薄い。それを拜見して非常に驚いた、實によく達意的に述べられて居ります。それでよほど啓發される所がありまして、爾來手紙で日生上人の御指導を仰ぎ、上人の御著書を片端から再三再四拜讀しまして、その後北海道へ旅團長として赴任致します際に、大分道心が起りましたものと申しますが、本多上人を訪ねまして、自分は實は道に志して居る、甚だ微力ではあるが自分の道心に満足をさせて戴きたい、言ひ換へて見れば、現役を退いて専ら佛道に入つて見たいといふ素志を述べましたところが、非常に御教訓がありまして、それは現役を辭めてやらなくても宜い、職に就いて居つてやつたら宜いだらう、兎に角紹介してやるから行つて見ろと言はれましたので、佐藤閣下の所に参りましたが、まあ好い時機に入れてやるから一先づ北海道へ赴任せよといふことであつたので、志を直ちに遂げることが出来ず、その後二三年経ちまして現役を辭めますと、直ぐに猊下の門に入つたのであります。さうして終に得度をさして戴いたやうな次第であります。

如何にも物を達意的に述べられる、私などが三箇月も四箇月も掛つて、三身即一などの思想を頻りに研究致しまして、到頭疑點が多くて堪へられないで、何時か上人をお訪ねしましたところが、北條へ行つて居られた。そこで直ちに北條へ汽車に乗つて行きまして、だん／＼自分の研究程度をお話したところが、たゞ一言『あなたは三身即一を論じようとして居りながら、三身を別々に考へて即一を論じようとして居るのではないか』と言はれた。まさう言つたやうな氣持で、全くその時は冷水を頭から被せられました。總てがさういふ具合に、極めて達意的に考へて居られる點に於ては、近接を致しまして非常に感じました一つの事柄であります。

それから私共のやうな後進の者を指導されることに就ては、實に細心の注意をせられて居つたもので、想ひ起しますが、お供をしながら關西方面及び九州方面までもたび／＼参りました。さうすると上人は汽車の中でも何處でもお寝みになることが上手であります、今此處でも話が出ましたが、汽車に乗れば

動き出すと直ぐ眠る、講演の前には前席をやつて居る間に横になつて眠る、さうして體を安めて十分の精力を以て演壇に立たれたものであります、私を指導して下さる爲に、しば／＼その時間を割いて、自ら聽衆の中に在つて、私の見えない席に於て私の講演を聽かれまして、その都度『どうも餘り組織立ち過ぎていかぬ、聽衆といふものは組織立つた話を聞かうとして居るのでないから、餘り頭腦を使はぬやうに、内容に力を入れてやれ』と言はれた。或時はどうも最初の十五分間が緊張を缺いて居つた爲に、聽衆がまるで馬鹿にしてしまつた。あれは初め五分間のところで出すべき調子が十五分間に出了。何と申しますか、笑はせるやうな話は最初の五分間ぐらのところでやらなければいかぬ、まあ例を取りますとさういふやうなことでありました。或は演壇に立つ前にいろ／＼信者が自分の傍にやつて来るさういふ者を一々相手にして居つたのではいかぬから、話は聞いて居つても耳に入れないで、静かに佛を念じる、さうして演壇に立つ場合には、本尊に向つて、今佛に代つてこの經卷を説く壇に立ちますと

いふ心持で話をしなければいかぬ。斯ういふことを随分聞かされたものであります、まあ魯鈍でありますからなか／＼さうお教の通り行きませんでありますましたが、終始本多猊下はさういふやうに後進を指導する爲に、眠る時間を割いてお教へ下さいましたことを、今更ながら心からお禮申上げる次第であります。その他まだ感想も澤山ありますけれども、この邊で御免を蒙ります。(拍手)

○司會者　これも永い間の御懇意であります高島平三郎先生が御出でありますから、一言お願致します。(拍手)

立正高等女學校長 高島平三郎

私は佛教の方面には極めて關係の薄いものであります、私が日蓮上人に非常な感激を持つたのは、私がズツと以前に日蓮宗大學に教授を頼まれて居りました時に、チョウド日蓮上人の降誕會がありました時であります、その時、今日も此處に来て居られる清水龍山先生から私に、日蓮上人の事に就てでなくともよいかから何か話をせよと言はれたのであります。併し降誕會にさう他の話も出來ぬ、兎に角

何も知らぬから何か日蓮上人の書かれた物があれば貸して戴きたいと言つて、それから御書やいろ／＼な本を借りまして読みました。それが私の日蓮上人に對する感激の一一番源であります。さうしてその後に本多さんが天晴會を招へられまして、それに關係していく／＼話を伺つたりしまして、今も野澤少將からお話がありました、私も隨分方々へ本多上人と一緒に講演に行きました。イヤもう實に能辯達辯で、非常に聽衆をチヤームされた。自分も聽いて居つて實に面白い、さうして非常な達辯といふことを私は感じましたが、實に偉い人であつた、それは何處が偉いかといふと、今頃では佛教でも、本當のインテリでいろ／＼な學問をした人や、軍人でも、軍人ナンといふものは兎角單純で、お稻荷さんで、も直ぐに引掛かるといふやうな人が居りますが、軍人だつてさういふ人ばかりではない、非常な堅實な思想を持つて居る人が居る。さういふ人が皆佛教の大乘、殊に法華經を研究されるやうになつたといふのは、その大部分は本多上人の力に依ると思ふ。無論その他の、田中さんにして、又日蓮宗の人達の

力もあつたでせうが、一番初めにさういふインテリの人を惹きつけることをやつたのは本多さんであると私は熟々思ひます。それは何故かといふと、今姉崎君のお話があつたやうに、ドン／＼勉強して新しいことは何でもやられた。英語の本や佛蘭西語の本は読みなかつたかも知れぬが、それを翻譯したものは何でも新しいものをドン／＼研究された。それで私などに會ふとその話を直ぐされる。この間斯ういふものを見たと言ふ。私も隨分いろ／＼な本を見た方ですけれども、私の見ないものをいろ／＼見て居られました。さうして自分が勉強したその知識を以てドン／＼説いて行かれるから、やはりインテリの人が非常に耳を傾けるやうになつたのだと思ひます。今日の宗教家などもどうしても本多上人のやうに本當に宗門を弘めようと思つたら、自分の専門の言葉ばかりでは世間に解りはしない。野澤さんのやうなあゝいふ優秀な頭腦を持つた人が、田中さんの本を讀んでも解らなかつたと言はれる位だから、一般の人は尙更である。ところが本多さんはさういふことに先鞭をつけた人だと思つて居ります。さうして

チツとも別け隔てをしない。一緒に方々歩いていろいろ面白いことがあります。長くなるといけませんからその一つだけを申上げます。懶か新潟へ行つた時だと思ひますが、私は一體他人と一緒に蚊帳の内に寝ることは嫌です。家内とは別問題ですが、（笑）他の人と一緒に寝るのは嫌です。唯その時はどうも廣い蚊帳を吊つたものだから、一緒に寝ると言はれたので一緒に寝ました。ところが弱つてしまつた。夜中にグードーといふ大きな雷様が鳴つて来て驚いて起きた。これは皆様上人と御一緒に旅行なさつたりした方は御経験でせうが、實際弱つてしまつて、チョイ／＼搖ると暫く止んで居るが、又直さやり出す。これは逆も堪らぬと思つて、私は枕を持つてそこらを歩いて居たところが、實はまア今日よりも二十年位も若い時だから、私が變な所に行くのだと思つてか、夜番をして居る人が『あなたは何處へ行らつしやる』と言つて私を咎めた。『まアあの音を聽いて呉れ、逆も寝られないから、何處か、女中部屋でもいいから寝させて呉れ』と言つた。それから物置場か何處かを片つけて、其處へ蚊帳を吊つて貰つて寝

立正大學長 清水龍山

たことがある、さうして翌日大笑ひしたことがあります。が、實にそのやうに交際しても少しも隔てを置かないで、實に愉快な磊落な人でありました。

その外いろ／＼なさういふ想ひ出も澤山ありますけれども、もう時間がありませんから私はこれだけにして置きますが、どうぞ今日の七回忌に方りまして唯上人を追憶するばかりでなく、お互がやはりさういふ風に、何をするのでも、今日の世の中はドンドン進歩して始終變つて居りますから、この變つて行くことをシツカリ捉まへて、古い遠い昔のものでも、それ等のものには皆新しい意味があるのでありますから、その古いものも、又新しい言葉なり人の説なりも、チヤンと皆一緒に自分のものにしてやつて行く、佛様がやられたやうなやり方をするといふことが、宗教家たるとその他の人たるとを問はず大變大事なことと思ひます。これを見て本多さんの追憶の言葉と致します。（拍手）

○司會者 いろ／＼な方に御感想を承りたいのであります、何分時間がありませぬので、最後に立正大學長清水龍山上人のお話を承りたいと思ひます。（拍手）

ツツとも別け隔てをしない。一緒に方々歩いていろいろ面白いことがあります。長くなるといけませんからその一つだけを申上げます。懶か新潟へ行つた時だと思ひますが、私は一體他人と一緒に蚊帳の内に寝ることは嫌です。家内とは別問題ですが、（笑）他の人と一緒に寝るのは嫌です。唯その時はどうも廣い蚊帳を吊つたものだから、一緒に寝ると言はれたので一緒に寝ました。ところが弱つてしまつた。夜中にグードーといふ大きな雷様が鳴つて来て驚いて起きた。これは皆様上人と御一緒に旅行なさつたりした方は御経験でせうが、實際弱つてしまつて、チョイ／＼搖ると暫く止んで居るが、又直さやり出す。これは逆も堪らぬと思つて、私は枕を持つてそこらを歩いて居たところが、實はまア今日よりも二十年位も若い時だから、私が變な所に行くのだと思つてか、夜番をして居る人が『あなたは何處へ行らつしやる』と言つて私を咎めた。『まアあの音を聽いて呉れ、逆も寝られないから、何處か、女中部屋でもいいから寝させて呉れ』と言つた。それから物置場か何處かを片つけて、其處へ蚊帳を吊つて貰つて寝

でありますから寧ろ私の方は上人の學問時代から、世の中に出る大體の經路は、同門の方よりズット能く知つて居るやうに思ふ。我が宗門の者は、後には提携して一緒に働きましたから、酒井日慎老師を初め皆お心安らはして居りますけれども、それは管長となられて經世經國の大事業に御奮闘なさる時代に提携されたのであります。私が上人を知つたのは十八歳か十九歳であつたかと思ひますが、中山の檀林の宗談林に居りました時分に、上人はチヨウド今の大西洋大學の前身の哲學館に居られた。井上圓了先生が西洋哲學を鼓吹した初めの時であります。その上人が哲學館に在學中、私は中山に居りまして、さうして或る時斯ういふ事がありました。あの時分には私共日薩上人の道徳を慕うて清淨結社報恩會といふ信徒の會がありました。それは皆學問の疇に無い信者の會であります。ところがたゞ説教だけでは満足せぬで、江東中村櫻に於きまして月に一回は必ずその報恩會の大演説會がありました。その時分に私の方の大檀林の寮長をして居つた宗門中有名な辯士でありました野澤義眞といふ人、これはその時分に

英書が讀めた男でありましたが、聲といひ、辯舌といひ、非常に齒切れの良い實に立派な辯士であります。その人の他に平木玄棲といふやうな人が三人ばかり能辯な人がありました。それが始終その講演に出て居りました。さうしますと、その時分の信者は、今の信者から見ますと餘程違つた所がある。どうしても諸經中王、最爲第一——四箇の格言を剝ぎ出しに言うては欲しくないけれども、法華超勝の意義を明かにして欲しい、それで皆錢を持寄つてさうして演説會をする。ところが私共の大檀林の方はハイカラであります。チヨウドその時分に中村敬宇先生が『我是造物主の在ることを信す』といふことを井上圓了さんの出された哲學雑誌に出しました。それを捉まへて、さうして遂には週つて創世紀の話まで持出して攻撃をドン／＼やつてハイカラがつて居る。信者はそんな耶蘇教退治の話などを聽きにやつて來て居るのではない。やはり宗門氣質で、四箇の格言から、法華超勝の意義を腹一パイに聽いて、さうして満身是れ膽にしたいといふ希望で來て居る。然るに一方は大變なハイカラな事ばかりやつて居る

から、感應共鳴しないものがそこにあつたと見えます。して、その時分はやかましい時分であります。特に哲學館の生徒であつた本多上人を招待してやつた。するとこつちはハイカラでやる、本多上人は四箇の格言を實に巧みに説かれた。モウその時分から私共とは斷然色彩を異にして、而も頭角を顯はして居つた、私も上人は誠見卓抜な人だといふことを感じました。何でもその時上人の名は世の中に知られて居て、中村櫻で講演があるといふことを聞いたから、その時分は交通が不便なので、中山から行徳まで出て、其處から船に乗り、大橋へ上つて、さうして歩いて行くのであります。すると四箇の格言を近代的に譯して、實にモウ何とも抜差しのならぬ巧妙なものである。所謂哲學館で村上專精博士の論理學を聽いて居るから、論理式に實にうまく疊み込んだ。そこで私はその時に、成程現代青年の布教といふものはあ、行かなければならぬなと思つた。日蓮宗の布教といふものは言葉には現はさぬけれども、四箇格言の確立を根本に有たぬならば宗門の布教ではない、一

種の通佛教だ。實にどうも二十年も昔のやうに「念佛無間、禪天魔、真言亡國、律國賊、諸宗無得道癡地獄の根源……チヤーン」とやつたのではいけません。それを論理式に今の實情に譯して四箇の格言を巧みに説かれた。實にどうも感服して、どうしてもあの型で行かなければならぬのだと思つて歸つたのであります。

そんな譯であります。本多上人はモウ書生時代から、その時代思想をチヤーンと擱んで、今高島老先生の言はれたやうに、舊い思想を新しい實話を使つて、さうして道理、文證、現證、是れ學要にあらず、法相の然るべきのみで、理窟と言はせぬまでに説かれた。それで終ひには清淨結社報恩會は高橋安右衛門、大塚藤平といつた金持の堅實な信者であります。多さんがその報恩會に特別に招待されるやうになつた。そんなやうな關係から、その時分から私は派別觀念を離れて、兎に角日蓮門下に本多上人以上の人があるか無いかといふことまで知らぬけれども、兎に角誠見卓抜、一種時流を擺んでられたお方だと

いふことで頭を下げてしまふたのであります。

それから後になりますと、私はモウ中山の大檀林を出るやうになりましたが、やはり報恩會に一緒に出ました。併し大檀林の野澤君の方はうまくは喋るが信者の方は本多さんを中心にして居る、こちらはお義理で行くやうなことになりました。それでやはり始終遊びに来られて、さうして野澤君等と碁など打つて——碁はあまりお上手でなかつたやうですが、して居られた。又私も大檀林によく行つて居つたので、能く上人のお顔をその頃から存じて居ります。

それから暫くしまして、明治二十五年——今日磯部浦事さんのお席へになつたものを見ますと、それには上人が東京で旗上げされた年代や宗義弘通所といふものを聞かれた時の綱領なども出て居りませぬが——その年が宗義弘通所を東京に開かれて、宗義綱領を天下に示された、奮闘生活の不惜身命の願望の初めであります。さうしてその時分に金坂といふ人が時の管長の錦織大僧正に僧籍返上を投出して、さうして本多さんが一統を率いて東京に第一弘通所

を置かれた。さうして時の舊式宗園に向つて改革を叫ばれた。その時分私は大檀林を退きまして、チヨウド宗門改革の「法鼓」といふのを主宰して居りましたが、その私の編輯して居りました『法鼓』に、あの十何箇所の宗門弘通所で大獅々吼をやつて旗を上げたその時の演題から、宗義綱領から、弘通所から、僧籍返上から皆書いてあります。それは私が上人の行動を見て嬉しくて堪らない、萬事斯ういふ風に行かなければならぬのだ、派別どころではない、上人の事業に感激して、自分の雑誌に二三百頁費して出して居ります。

それから暫く時が経ちまして、例の私共の叡山遊學時代に、あの『各宗綱要』の四箇の格言問題、四箇の格言をどうしても入れなければならぬと言ふ、我が宗門の方では、極めて温厚なる、何事も争はぬといふあの小林日董上人が『大事な四悉檀教義に違ふものなり』として四箇格言を除いてしまつた。そこで上人は毅然とされてあの訴訟になりました。何處までもやはりズツと型は變つて居るけれども、四箇格言、破立、宗門氣魄を何處までも持してやつて

居る。前に聽いた演説は上を戴うてやられたが、今度は本當に赤裸々に宗門氣魄を剥き出して、時の法廷にまで立つて宗教改革を叫ばれた。今日の錯綜せざる問題の多い時に上人が在つたらどんなであらうと思ふのであります。

さういふ譯で宗門の復興といふものはこれ式で行かなければならぬのだ。内宗門を顧れば、或は第一流の本當の篤學の方はあるかも知れぬけれども、識見卓抜にして時代に適應して行くことに於ては、この人に肩を並べる人は無いといふので、私は一個の青年として、自分の師表とし、大法弘通の模範として上人を尊崇し、敬慕して居つたのであります。

彼此れして居る内にあの天晴會が創められました。さうして上人は故成日誓師を伴うて私共を大學に訪ねられて、私と柴田一能君とが中心でやつて居りました時分ですが、言はれるには、高山樗牛が田中先生の指導に依つて日蓮研究を言ひ出して以來非常に世の中に流行して來たが、これを指導しなければいかぬ、それには派別觀念を忘れて共に提携してやらうぢやないかといふことでありまして、さ

うして小林先生や何かにもお願して、私の方の宗園からも加入させて戴いて、活動を始めました。今想ひ出しますと、高島平三郎先生も私からお勧めして入つて戴いたのだらうと思つて居りますが、二回目の講演かの時に山根日東君が幹事をして居て、どうしても君やれ、嫌やだ、その器でないから……と言つて断りましたが、到頭宗門の當番見たやうな理窟で出来まして話をしました。下手の長談義で二時間ばかりやつたのでありましたが、その後で上人が晚餐後餘計召上らぬのに麥酒でも召上つたものと見えて、赭い顔になつて其處に出られて『日蓮宗の中興三師ナン』といつていろ／＼な先生方があるけれども、米の値段も分らぬ時分に暇潰しに下らない事を言うて居る』斯うした一言を聽いて私は堪らなくなつた。後から考へて見れば、チヨウトも腹を立てることもなかつたのだけれども、まだその時分は上人の御性格が本當に解らなかつた。唯教義、學說、辯論には感服して居つたけれども、御性格は解らなかつたのですから、どうも各宗が手を携へて一緒にやらうぢやないかといふのに、中興三師を米の値段も知ら

ぬ時代に下らないことを言うて居るなどと言ふことは、あまりにひどい、それでは日蓮主義の正統なるものは本多上人を指して他にないといふことになる。それなれば何故に吾々の所に相談に來たのか、

これから一緒に吾々は仕事は出來ないといふので、私は向ツ腹を立てゝ天晴會の脱會を申込みました。その時分直ぐ間近に、龍の口で第一回の宗祖門下の統合大講習會があるといふのに、私はその天晴會脱會の趣旨を新聞に發表するといふ所まで至つた。ところが高島先生や姉崎先生が、そんなに向ツ腹を立てぬでも宜いぢやないかと言つて宥めて下さつたが、イヤ辻も駄目だ、吾々は共に仕事は出來ないといふので袂を別ちました。

これから今度は又本尊論でぶつかつたが、その間に一つも派別觀念はありませぬでした。先輩後輩の身分知らずに偉がるといふやうなことは勿論あります。たゞ上人の本尊論の中に、立正大學などで優陀那日輝師の言つた事などを二年や三年やつて駄目だといふやうなことを書かれた。それで又腹を立てた、吾々はたゞ無駄飯を食つて居つて、人を欺き自

らを欺いて居るものではない、吾等はこの立場でやつて居るぞ、上人は先輩の苦心や人の努力をまるつきり無視して居るといふので、憤然立つてぶつかつて行きました。

するとチョウドその頃東洋大學の忘年會がありました。私も講師をして居つたので、日比谷の陶々亭の晚餐會に参りました、中島さんが學長の時代でありました。中島さんが卓が一つであります。するとその席上上人は斯ういふことを言はれた。「物事は總て明日を見なければいかぬ」この一言を聽いて私の今までの腹立は一遍に飛んでしまつて。自分は何といふ愚な事をして居つたかと思つて熟々後悔しました。今も高島先生や姉崎先生の言はれた通りであります。明日を見て行かなければならぬ。若し上人が今日在世であつたら、哲學館、今の東洋大學の内に商業學校を建てたかも知れない、法律學校も建てたかも知れない、何をされたか知れぬ。上人は明日々々を一步々々と行かれた人であつた。すべて我等布教に志す者は明日を知らなければいかぬ。ハハアこれで解つた、この人の

總ての布教法から指導法は、明日を知り現代を知つて、さうして舊いものを現代及び明日に役立つやうにされたのだ。ところが古典研究者といふものは、明日や現代よりは寧ろ過去の方にばかり眼を着けて先輩がどう言つたか知らん、先人の跡を一々叩いて所謂過去帳を繰返して讀んで居る。私共がそれである。併し現代の布教に志さんとする者は明日と現代とを見て、大法を弘めるといふ上から言へば、少々御妙判の或る説には抵觸しても、それは又會通は他日附くことであるから、高所大觀から、達人は大觀です、日蓮上人の教義を弘通すれば宜い。上人の眼中にはそれしかない、明日及び現代を指導するのだといふ一念だけで、派別觀念もナニモあつたのではない。それだから、中興三師の無駄飯食ひとはれたり、本尊辨——日輝師の學説ナンといふものは眼中に置かんナンと言はれたことは、それは優陀那日輝師の學説には斯うあると一々言うて居ては、恰も私の書いて居るもの見たやうに、専門の者でも解らぬ物になつてしまふ（笑）だから上人は私共のやり方を見て、「此奴、下らない事にばかり骨を折つて、

馬鹿な奴だ」と言つて笑つて居られたらうと思ふであります。實に達人達觀、高所大觀して現代を指導するといふ點に至つては、我が宗門に曩に五十年前に新居日薩師あり、後に各門下を通じて本多日生上人が次いでの人でありまして、明治から今日に掛けての宗門弘通の上に於て、最も時代に能く合ふやうに、若手や物識りに理解を得るやうにした點に於ては第一流の人で、他に追随する者がないと驚いて居る次第であります。

そんな次第であります。今まで御生前上人の御人格や御行動には絶對敬服して居ります。その一つに、いつか上野で、水戸の布教から歸られた時分にその頃自動車の少かつた時で、電車の吊皮にぶら下つて居られたお姿を見まして、大僧正、管長ともあらう人が、あんなに苦勞して布教して居られる、昨晩は何處で骨折つて布教して來られたか知らんと思つて、遂に敬意を表して拜みました。その位に敬慕して居つたのであります。

さういふ譯であります。決して派別觀念で諍ふといふ譯ではありませんが、今まで表面上諍ふとい

ふ状態でありますのは、さういふ所から來て居るのであります。極く舊い者と極く新しい者の衝突であります。さうして識見卓抜と頑冥固陋との衝突であります。(「ノーノー」)この點を呉れてもお許しを願つて置きたいと思ひます。(拍手)

○司會者

最後に御遺族の方から一言御挨拶がござります。

御遺族代表 本多操

今夕は皆様方の御熱誠、御盛大なる記念の御催しを戴きました。寔に有難うございました。茲に遺族一同謹んで厚く御禮を申上げます。(拍手)

○釋尊御降誕會

同日午後一時半開會
法要及講話

佛の國土	小林一郎先生
釋尊の教化	小西日吉先生
其他數名	

主催 財團統一園

電話牛込五三三六番

豫告

来る四月四日の日曜日午前十時から子供達の爲めに本部講堂で御供養其他の儀物致します。親御等お捕でお参詣下さい。

—記念品贈呈—

講演 廣い講堂に六時頃から聴衆は詰めかけて、定期を待ちかねられる有様に嬉しさが込みあげる。

拍手に迎へられて山田博士は其の温容を壇上に現

はされて、簡結に開會の挨拶を述べられ喝采の鳴り止まぬ間に早くも、本多前獨逸大使は起たれ急遽又復講堂を壓した。

本多前大使は、今晚八時頃緊急の用件で御親戚に行かれねばならぬ極めて忙しい中をば、特に日生上人とは御近づきの日は割合に浅かつたが、精神的には非常に深いものが互感應されて居たから、

講演も「非常時の旋風裏に日生上人を憶ふ」といふ

題下に、國家の現状を達意的に敷演され、日生上人の國家觀と共に或は諸謹を交へ或は譬諭をあげたりして、滔々懸河の無礙辯に、數百の聴衆は全く魅了された姿であつた。いづれ本誌又は教誌に掲載させて頂く積りであるが、思はず時間を充分に戴いて一同は大法悦であつた。

小笠原子爵は、これも他に急用が起つたので緩々とお話を拜聽出来ないと思つたが、別掲の如き耳新らしい上人の故事を承ることを得て洵に有難いこと

○ ○ ○

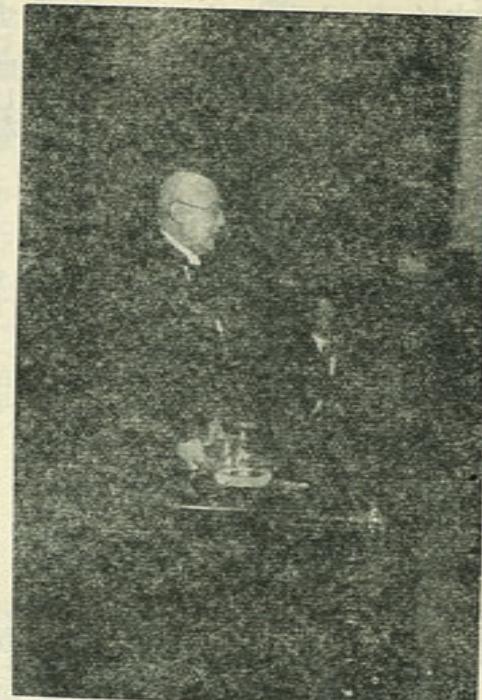
七とせを振りかへりてぞむ題目
講演の幕しまりけりほとゝぎす

師をあもふ心は同じ春のくれ

本多上人を憶ふ

四六

海軍中將 小笠原長生



三月十四日霧峰會館に於ける 小笠原子爵の御講演要旨であります。

時日のない爲めに御校閲を経て居りませぬ、文責は記者にあります。——稿部

只今本多先生から、實に痛快な、又博識なお話をあつて、吾々は何とも言へない面白味を以て伺つたのであります。あゝいふお話を伺ふと、私共も青年時代の、軍艦に乗つて居た時のことが言ひたくなつて来て、どうも法華經がどうの、御遺文がどうのナンといふことはなんだか陰氣くさいやうな氣持が

するやうになつて來まして、私も一つ茲で以て、「本多上人を憶ふ」といふ題を急に變へて、軍艦問題とか、軍擴問題でもやつて見たいと思ふのですが（拍手）それをやりますと、この會が何の會だか分らなくなつて、宗教の會なんだか、或は外交の攻撃演説なんだか、或は又これが軍備擴張ナンといふことになつて來ると甚だ穩かでないのですから、私はやはり初めから申上げました通り「本多上人を憶ふ」といふ、柄にもない、甚だ地味な事について自分の考を少しばかり申上げようと思ひます。併し今もう有ゆる事が本多先生に依つて出て來まして、遂にはお定さんまで出ることになつた（笑）、もうこの上附加へて言ふやうなことも何だか無いやうな氣持もするのでありますが、併ながら本多先生は唯徒に外交の事を茲で以てお話になり、又或る方面に向つての警愾を皆さん方に吐きかけるといふ譯でもなかつたらう、それはやはり深く考へて見ると、日蓮上人のお心持を言ひあらはして居るものであると思ふのであります。

私はチヨウド二三年前（ねんぜん）の二月十五日の晩に放送をしたことがあります。それは題を「日蓮上人の大豫言」として放送をしたのであります。只今チヨウド本多先生がお話になりました、各國が日本に對してそれ／＼脅威を示して来る所は、チヨウド法華經勧持品の二十行の偈を國として今日本が読みつゝあるのだと思ひます。若し日本が本當に法華經の國であるならば、必ず國として、勧持品の二十行の偈がいつか現れて來なければならない。結局日蓮上人のお時代に蒙古が攻めて來たといふことを以て、あ

れが即ち國として、勧持品の二十行の偈を讀んだといふことになつて居るのであります。どうもあれでは物足りない、元が攻めて來ただけでは何だかまだ物足りないと思つて居りますと、昨今この様子といふものはどう見てもこれは、勧持品の二十行の偈が國として現れて來たやうに思ふのでありますから、若し本多日生上人をして今日在らしめたならばどうであるか。先程も本多先生が頻りに言はれたのあります。が、私も日生上人に暫く親炙して居つたのであります。いろいろな國家の大事の時には必ず奔走して居られる、その中には随分お話をしくいやうな事までして居られて、さうして國家の爲に暗に盡されて居つたのであります。例の幸徳秋水事件の時あたりでも、唯一人で以てあの連中の集つて居る所に乘込んで行つて、さうして非常な激論をして彼等を説得して居られるのであります。その效果がどれ程であつたかといふことは分りませぬけれども、併し宗教家として唯一一人、反對派の澤山集つて居る所に乘込んで行つて、さうして彼等を説得しようといふ、その勇氣だけでも學ぶに足りると私は思ふのであります。お經の中に

信有つて解無ければ無明を增長し、解有つて信無ければ邪見を增長す。

といふ言葉があるのであります。信仰と、それから知識或は學問、それは兩方併つて行かなければ本當の宗教家にはなれないのですが、これがなかなか難かしい。動もすると、信仰を鼓吹して、さうして學問の方はどうでもよいといふやうになる。併し又學問は非常にするけれども、そこに信仰が伴はない人も

ある。日蓮上人が

智者學匠となるとも地獄に墮ちて何の詮かあらん。

と言はれたのは、信仰の伴はない學問の危険を言はれたのであります。併し又、幾ら信仰があつても、そこにそれを分別する知識がなかつたならば、その信仰が飛んだ間違つた方へ行くかも分らない、或は迷信となり、或は妄信となり、或は又進んでは狂信となるかも知れない。近頃の新聞にも出て居ります『死なう園』、不惜生命といふことを實地にするのだといふのですけれども、不惜生命はやたら無性に腹を切つてそれでよいといふものではないのであって、その不惜生命には、身命も惜まずして護るものがないと言つて居られる位なのでありますから、吾々も一日も長く生きて、さうして一日も長く皇室の御爲、國の爲に盡さうと考へなければならないと自分は思ふのであります。

日生上人はそこを飽くまでやられた。前にも申上げました通り、信解の二つを兼ね備へて居られた上に、非常に日生上人は實行力の強い方だつた。勿論日蓮宗は實行の教でありまして、即ち日蓮上人の前身と言はれる上行、無邊行、淨行、安立行といふ四菩薩は皆下に『行』の字が附いて居る。即ち實行しなければ日蓮主義ではありませんが、本多上人の實行力と申しませうか、實行欲と言はうか、そ

れは實に驚く程のものであつたのであります。

斯ういふ話がある。私がいろ／＼お世話になつて居つた時であります、或時私の所に來られていろ／＼な話をした序でに、日蓮上人の活動寫眞の話が始まつた。今本多先生からも活動館のお話が出て居りましたが、その活動寫眞の話が始まつた時に日生上人の言はれるには「どうもどの活動寫眞を見て居ました、日蓮上人に關係した活動寫眞を見るとイヤになる」これは私も御同感であります。私は芝居が好きでありますし、殊に日蓮上人の芝居が好きでありますから、九代目の團十郎を初めとして、先代の梅王のも、又訥子のも、或はその他のいろ／＼の人気が演つた日蓮上人は殆ど見て居るけれども、見る度に「あゝ来て見なければよかつた」と思ふ。それはモウ所謂名人と言はれた九代目團十郎のを見てもさうなんです。自分の頭の中に理想として置いた日蓮上人といふものが、見ると壊されてしまふ。その話になつて來た。それで頻りに日生上人も「何とかしてよい日蓮上人の活動寫眞を掩へたいものだ」斯う言はれるから、そこで私はさう言つた「上人、あなたが出たらどうですか、あなたが日蓮上人になつてお演りになつたらどうです、それだけの勇氣がありますか」或はこの中にはその當時の上人を御承知の方で、この事もお聞きになつて居られる方もあるかも知れませぬが、上人はその時眞面目に考へられた。さうしてそれから、活動寫眞についてどういふ風にしたらよからうか、又從來の芝居で演る日蓮上人はどういふ所を主に演つたか、といふやうなことを屢々私の所まで相談に來られたのであります

すが、此の一事でも即ち日生上人が如何に實行に重きを置き、又實行欲が旺んであつたかといふことがわるのであります。

それから又斯ういふ話がある。チョウドこの間侍從長を辭められました鈴木大將、それから今晩は見えて居られませぬが、日蓮主義の皆さん方に馴染の佐藤鐵太郎中將この二人の方がどちらもまだ大佐であつた時分に、二隻の軍艦の艦長をして居つて、それが同時に遠洋航海に行くことになつたのであります。チョウドその時に鈴木大佐は宗谷といふ艦の艦長をして居られたのでありますが、自分の家の宗教が顯本法華宗なんです、それで一度日生上人に艦に來て戴いて、乗員總てに法華經の事を話して貰ひたいから、その事を一つ斡旋して呉れないかといふ話であつた。そこで私は日生上人にその話をしましたところが、それは喜んで行くから、その日の打合せをして呉れといふことで、その日の打合せが出来たものでありますから、私は品川から御一緒に汽車に乗つた。汽車に乗ると、乗つてから挨拶をして少しの間はお話をして居られたが、その中にボケットから小さな本を出して一生懸命に読み始められた。それを何かと思つて側から見ますと、法華經の縮刷になつたものです。そこで私は何の氣なしに「何處を御覽になつて居るのでですか」と日生上人に伺つて見た。すると斯う言はれた「これから行つて宗谷で以て兵員一同に法華經の話をしなければならないから、若し言ひ損なひや思ひ違ひがあつてはいかぬから、そこで壽量品の所を讀んで居るのだ」私は實にその篤學と申しませうか、又その親切と言

はうか、それにどうも非常に敬意を表せざるを得なかつたのであります。先程からいろいろお話を出て居りましたが、本多上人は實に博覧だつた。これは後で博覧強記のことを申上げますが、それが縮刷の法華經を入れて、而も汽車の中でそれを更めて調べて行つて、さうして向ふで話をしようといふのだ、これは篤學の人でなければ出来ないのであります。

それから又私が日生上人に最も敬服して居るのは、法華經を通じて一切經を見て居られたといふことであります。私は常にさう思つて居る。この頃佛教は果して昔より盛んになつて居るのであらうか衰へて居るのどちらか、これは餘程の問題だと思ふのであります。成程或は檀家は幾らかづつ植えて行つて居るかも知れない、又斯ういふ集りの時には前年よりも多く人が集るやうになつて居るかも知れない。併ながらだんく澤山の人が植えて行つて居る、それと比較して見て、果して佛教が盛んになつて来て居るかどうかといふことは問題なんです。それからどうもやはり昔の氣持が除れないと私は思ふ。佛教徒の方々に甚だ失禮なことを申上げるやうだが、私はやはり昔の封建時代を夢みて居られるのではないかと思ふのであります。それで嘗て私は或る宗教大學に行つて講演をして呉れといふ時に、斯ういふ話をしたことがある。今日はモウ出版業が盛んになり、又印刷業も盛になつて來たものでありますから、法華經なり御遺文なりの講義といふものは澤山種類が出て居る、であるから法華經の大意であるとか、或は日蓮上人の御遺文の大意といふやうなものはその本を見ても大體判る。必しもお上人のお

説教を聽かずとも、又演説を聽かずとも大體は分るが、吾々に一つ分らない事がある、それは不惜身命といふのはどういふ風にして死ぬものなんだか、どういふ風にしてその身命を捧げるものなんだか、それが分らない。でありますから私はその時にその宗教大學の方々にお願したのであります。それは外でもない、チヨウド満洲事變が起り、上海事件が起つた當時であります。どうぞモウ法華經の講義あたりはして戴かないでよいから、斯ういふやうな國家的大事の起つた時に軍隊の真先に立つて珠數を振りかざして、皇室の御爲、國の爲に生命を捧げるのは斯うしてやるものだとといふ、不惜身命のお手本が示して戴きたいといふことを私はお願したのであります。これは日蓮宗ばかりではない。他の佛教の方々でも、どうも經文に執はれるといふ形がある。私は經文に執はれてしまつたら駄目だと思ひだけ見ないやうにする。それから又今度は淨土真宗や、淨土宗の方々は、三部經の外は成だけ見ないやうにする。真言宗の人には大日經より外は成だけ見ないやうにして居る。鎌倉自分のものだけが善いとなる。併しこれは七千卷も八千卷もあるものでありますから、その中の此處が中心だ、是が基礎だといふことは勿論大切である、それでなければ唯散漫に流れてしまふのだから。扇の要のやうだといふことをする。法華經に對して言ひますが、成程それはそれに違ひない。だから法華經を基礎としたら、その法華經に執はれないで、それを通して總ての一切經を見て行くといふことが必要なのであらうと思ふのであり

ます。他の「お經にだつて立派なことが澤山書いてある。それはモウ日蓮上人の御遺文を御覽になると分りますが、縦横自在にいろいろな方面から例證として他的の「お經」を引張つて来て居られる。さうして又他の「お經」を總て見て、その上で初めて法華經の尊いといふことが分つたのでありますから、これはどうしても法華經なら法華經を本として他のものを開顯して行かなければならぬ。日生上人はそれをやられたのです、即ちそれが今日謂ふ「大藏經要義」なんです。

これに就ても私は一つの信念を持つて居りますし、又それと同時に日生上人の所謂實行に忠なりといふことの一つの例になるのであります。その當時天晴會といふのがありますて、今晚も見えて居りました姉崎博士だの、山田博士だの、清水龍山師などの如き立派な方々が出ては、交るゝ其處でいろいろ法華經に就ての感想やら、研究やらを話された天晴會といふ會があつた。「天晴れぬれば地明かなり」といふ日蓮上人のお言葉から取つて「天晴會」と名づけたものである。ところが私の所に同僚の、その當時チヨウド少佐の人達が三人見えて、私は斯う言はれる、吾々は法華經を有難く一つ講釋をして行きたいと思ふのに、天晴會は何だ、それは皆氣焰の吐き比べのやうなことをして居る、面白いには違ひないけれども、吾々は眞面目に一つ法華經を研究して見たいと思ふから、どうぞこの事を本多日生上人に取次いで呉れといふことであつた。それから私はその三名の方を連れまして——これは皆後に將官になつた立派な人達であります——さうして品川の妙國寺へ行つて、本多日生上人にその事をお

願した。すると即座に引受けられたと同時に、それがチヨウド火曜日位だと思つて居りましたが、「この次の土曜日からやらうぢやないか」斯う言はれる。善いと思つた事は直ぐやる「それにはチヨウド淺草の清島町に盛泰寺といふ寺があつて其處がよいから、其處で以てこの次の土曜日から始めよう」斯う言はれる。さうして私は言はれるのに「まだ自分は研究も出来て居ないし、今度は速記者も居らず、あなたが一つその時の速記をやつて見て下さい」斯ういふことで、その次の土曜日から清島町の盛泰寺といふ寺で法華經の講義が始まつた。この盛泰寺が今日の統一閣になつて居る。さうして一年か一年半位でその法華經の一通りが済んで、それから御遺文に移り、それが續いて例の大藏經要義になつたのであります。大藏經要義は、即ち私が今申上げました法華經といふ篩を通じて一切經を批判していく、又一切經を吸收して行く、又一切經を啓發して行くといふ考でありました。

その當時斯ういふ話がありました。東本願寺の宿老で、私もよく知つて居ますが、石川舜台といふ偉い人があつた。九十幾つまで生きて、惜かもう亡くなられましたが、この石川舜台翁が、日生上人の大藏經要義に對して斯う言はれた、「本多さんは實にいゝ所に眼をかけられた、法華經を通して一切經を啓發して行かう、一切經を批判しようといふ所に眼をかけられたのは實に敬服する、この石川がもう二十年も年が若かつたなら、私は三部經を篩として、三部經を通して一切經を批判して見たいと思ふが如何にももう年を老つてその氣力もなし、又諂ひも許さないから、どうぞ本多さんはどこまでも法華經を

通して一切經を啓發して下さい」といふことを言はれたと聞いて、その時に本多上人は「それは洵に有難い、石川老師は人物としては非常に偉い人だけれども、淨土三部經からでは如何に偉い人でも一切經を自由自在に開顯し統一すると云ふことは到底出来まい」と申されて居りました。

斯ういふ風に、法華經を依經とはして居られるけれども、それに執はれないで、その法華經を通して總てのものを批判するといふ餘地と、それから學問とが大切なんです。これがだんぐり擴がつて行けば即ち政治の大勢も、外交の様子も自然分つて来る。今日は如何なる状況であるか、思想界は如何なる状況であるか、即ち鎌倉時代と同じやうであるか、或は又他のいろ／＼な宗教が入つて來たが、それに對してはどうしてよいのであるか。さういふ風にやはりその時の時勢に順應して、日蓮主義なら日蓮主義を改め進めて行かなければ、本當に國家の爲に盡すといふことは出來ないだらうと思ふのであります。六百年も七百年も前の儘の形を以て今日でも、「念佛無間、禪天魔、真言亡國、律國賊……」これだけで以て日蓮主義が終ると思つたら大變な間違だと思ふのであります。今日は先程から本多先生も言はれた通り、政治といひ、外交といひ、又經濟界といひ、總ての點が研究の餘地があるといひますか、これを聞いて行く必要があるが、皆何處も彼處も或る所までは行詰つて居ると思ふ。行詰つて居るやうな時は偉人が欲しいのである、即ち海軍に於ける東郷元帥のやうな人が欲しいのであります。併しその中で最も偉人の欲しいのは何處かと言つたら、私は宗教界だと思ふのであります。日蓮上人は御承知の通

り

佛法やうやく顛倒しければ世界また濁亂せり、佛法は體の如し、世間は影の如し、體曲がれば影斜なり。

と言つて居られる。佛法が本である。その佛法が顛倒してしまつたら世間は濁亂する、濁つて亂れるのだ、何故かといふに、佛法は體であつて世間は影だ、即ち思想が本であつて實行は末だ、だからその思想が曲つて居つてどうして實行が出来るか、と、日蓮上人は言つて居られるのでありまして、最も思想といふものが大切なんです、お釋迦様も斯う言つて居られる。慥か波斯匿王といふ王様がお釋迦様に質問をした時のことだと思いますが、波斯匿王が、今日の言葉で言ふと、國防をどうしたらよいですか、と言つてお釋迦様に質問した。さうするとその時のお釋迦様の答が面白い、先づ親孝行を獎勵せよと言つて居られる。これは印度のやうな國柄でありますから親孝行だけを言つたのでありますと、親に孝行を盡すといふことはこれが總ての思想の本になることは分つて居る。ところが波斯王が聽いた時にお釋迦様が——私はそれを反對に言つたのですが、「今孝子出でず、故に國危し」斯う言つて居られます。親孝行の者が居ない位であるから國防はむづかしいぞ、斯う言つて居られる。それは今日のやうな斯ういふ時勢になりますれば、機械も大切だ、又軍艦も大切だ、軍隊も大切だ、併

ながらその魂となる思想がシツカリして居らねばならぬ。大きな船でも長い大砲でも、その本當の威力を發揮し得るのは、それを取扱ふ人の思想如何に依るのであるから、お釋迦様が、親孝行を獎勵せよそれが國防の根本義だと言はれたことは非常に味ふべきことだと思ふのであります。隨て若し本多上人のやうな方が尙ほ生きてお居になつたならば、今日のこのいろいとむづかしい、或は外交の上の非常時であるとか、或は經濟界の逼迫であるとかいふやうな、斯ういふことを見られる毎に益々奮勵して、さうして純の純なる日蓮主義を鼓吹して、さうしてこの國家を救はうとされたに違ひないのであります。もう本多上人も亡くなられて七回忌になり、肉體は滅びて居る。併ながら本多上人のあの意氣と、あの熱烈と、あの至誠と、あの忠實とを以てしたならば、それ等の魂はモウ今日でも儼然として居つて、吾々を指揮し、吾々を鞭撻し、さうして皇室の爲に盡せよ、國家の爲に盡せよと、今晚もこの場所に現れて吾々を鞭撻されて居ると私は思ふのであります。（拍手）

もう時間も過ぎましたし、本多先生のお話で飽満して居られるでありますから、私は口取や甘煮の後のあ茶漬として一言申添へたのでありますから、どうぞ皆さんは本多上人の志を擴んで、さうして何業に依らず——お經にもあります通り、「俗間の經書、治世の語言、資生の業等」を説かんも、皆正法に順せん』正しい信念に住して自分の職務本分に對し忠實にそれを盡して行けば、即ちそれが法華經の功德と同じ功德を示して、君國の爲に盡すことになるのでありますから、どなたが何業に從事せられるともそれは構はない、至誠を以て貴い教を信じその本分を盡されて行くといふことが、總てこれが法華經の隨喜功德になり、隨て本多上人の供養になるといふことをお考へになることを希望する次第であります。（拍手）

日生上人 法統正脈の内容を論じて曰く、是は要するにむづかしい言葉で、形に現はせば法統として傳はるその法華經の意味合を正しく解釋する、法華經を方便の教のやうに墜してはならない、法華經を達門の教義に墜してはならない、本門の教義に基いて法華經を弘めて行くそこに法華の正脈があると斯ういふ次第である。——法華經を法とか教とかいふけれども、別途のものがあるのでない、法華經の教の實質といふものは、即ち自分自身と佛様その兩方の關係といふやうなことに存するものである。法といふのは何か魔法みたやうな譯の分らぬクシャ／＼言ふものがあるのではない、この妙法蓮華經といふ蓮華といふものは是は實は花の咲いて居る時に中に實が出来て居る、その實の中に芽が出て居る、因果在り、果中因在りといふ、因果同時といふことを現はして居るものである。是は一遍頭にとつくりと入れて置かぬと、法華といふことは少しも分らぬことになつてしまふから、何遍も言ふ言葉であるが、今日は少し落付いて頭に入れたら宜しからう。折角人間に生れて來て法華經を何遍も聽きながら、解つたやうな解らぬものだといふので死んで行くのは残念な次第であるから、一つ本氣で聽いて見たら宜しからう。云々

統

人團

統

團發行

次 目

阿含の人身觀(下之二).....	本
日蓮宗概觀(其七).....	故梶
開目鈔講話(第七講).....	小
菅公代辯感.....	す
記	が
○本部圖報.....	林
○地方教信.....	木
寄附金維持及團費誌料領收	多
大藏經要義續篇(共三).....	は
和歌數首.....	一一顯
大藏經要義續篇(共三).....	日
本多日生	ら郎
本多日生	正生